

校長室から アッサラームアレイコム！

No.4 H26.9.15
文責 井手



■教育観を変えてくれた詩の一節

初任五年目の二校目、1980年、昭和五十五年頃だったと思います。ある新聞に掲載されていた、障害を持った十六才の少年の詩の一節に、それまでには出会ったことのない説得力を感じました。それまで、人権教育をしっかり自分のものにしていなかったとか、何かしつくりこなかった私にとって、衝撃的なものでした。また、はっきりとした教育観を持っていなかった若輩者の私にとって、この一節から様々な広がりでも多くのことを学ぶことができ、我が教育ビジョンへとつながっていきました。

「知らないことから誤解が生まれる。誤解をそのままにしておくとは偏見になってしまう。偏見が積み重なれば差別になるんだ。」

その人の表面や姿だけを見たり聞いたりしただけで、その人を非難したり批判したりうわさをしていると、そこに誤解が生まれてくる。その誤解をそのまま放っておくと、冷たい目で、いわゆる偏見の目でその人を見てしまう。そしてついには差別心が生まれて、差別的な言動をとるようになるという、私はこの詩を読んで、まさに人権教育の原点ともいえる一節だととらえました。さらにそれは私のそれからの教育観をも変えてくれました。というよりも人生観をも変えたと言える一節でした。

これは目の前の子どもを表面だけ見て判断するような、大人の一方的な見方ではなく、その子を深くみつめ知ることが、理解することがとても必要であることや今から出会っていく人々との関わりの中、人間関係の形成や構築にとっても、とても大切なことに思われたからです。

それからというものの学級経営や学年全体の柱にこの一節を掲げ、人権週間や旬間のみならず、子どもたちの日常生活に根ざしたものにしていこうと努力してきました。

学校経営を任された立場になっても、これからの子どもたちに一番必要なことは、「響き合える豊かな心と響き合える人間関係の構築」であると言い続けてきました。そのためにも「知り合う」こと、「わかり合える」ことがとても重要です。どう響き合えるか。そこにはやさしさや思いやる気持ちがお互いに必要です。そしてより良い方向に向き合える関係やそのことをきっかけにお互いを尊重しあえる、尊敬しあえる関係が生まれるのではと思います。

「響き合い」を教育のキーワードとして、豊かな心や豊かな人間関係が形成され構築できれば、落ち着いた学校生活や家庭生活が送れると考えています。

おしらせ

■児童生徒数48名になりました。

7月末に45名から41名に減ってしまった児童生徒数でしたが、昨日の転入生1名を加え、9月15日付けで48名(小41名・中7名)となりました。昨年のこの時期の人数が36名でしたので、この1年間で12名増です。再開校の5年前は8名から始まったドー八日本人学校も、益々活気がでてきました。

【校長の一言】 言葉づかいは心づかい。他者をからかわず、他者をさげすまず、他者を悲しませず。

(桑原 律「言葉と心」より)